

山口 茂著

『流通經濟の貨幣的機構』

高 橋 泰 藏

一

本書は山口教授の過去十數年に亙る研究の集成であり、凝結である。それは單に教授のこれまで發表せられたものが纏められたと言ふ意味ではなく、それらに見られたやうな思索を通して教授自身の到達せられた經濟世界がそこに展開せられてゐると言ふことである。その意味で吾々は先づ一つの世界を有つものとしての學問に對する氣持でこれに向はなければならぬ。本書については既に新庄博氏（國民經濟雜誌）並に鬼頭仁三郎氏（一橋新聞）によつて、そこに取扱はれた問題と取扱はれざりし問題との兩面から明快な批評が試みられた。それにも拘ら

ずこゝに讀後感を敢て重ねようとするのは、そこに繰り返へし汲みとらるべき態度の問題があると思はれるからである。

本書の全體を通じて強く感ぜられることは、そこに經濟世界を「眼に見えるやうに」描かうとする欲求の常に動いてゐることである。言ひ換へれば全體としての經濟世界の構造が具體的に觀念せられるのでなくしては満足しえないと言ふ氣持である。このやうな欲求は恐らく何人にも多少ともあるものと言はなければならぬであらうが、吾々は教授に於てこの欲求の最も熾烈なるものを見るであらう。吾々が本書に不思議な魅力を感じるのはこの故である。勿論「眼に見えるやうに」描かれうるか否かは、問題の性質にもよるであらうが、同時に學問の性格によることである。事柄の意味を考へ、動きの力として理解しようとする考方にあつては恐らく全體の畫を描くと言ふ欲求は起らないであらうし、従つてこの點から直ちにその價値を論じえられないことは言ふまでもない。しかしこのやうな學問の性格についての反省乃至意識なしに、漫然と對象に向ふ傾きのあつたこれまでの日本の經濟學の中にあつて、本書がその一見茫

漠たる風貌の中に強い個性を感じしめるものゝあることは、恐らくこの點にあるであらう。

經濟世界を「眼に見えるやう」に描かうとする教授の欲求は描かれた世界を素直に畫——教授の所謂圖型に表はさうとする試みとなつて現はれてゐるのであつて、吾々はこれを隨所に見ることが出来る。それは單に教授自らの描いた世界のみでなく他人の描いた世界をも畫に直ほすこととまで及ぼされてゐる。

そこには自分がそれを通してある世界を描きうるやうな書物は著者もまた「眼に見えるやうな」世界を念頭に描きつゝこれを記述したものであり、従つてこれを自らの中に再現しうるやうに讀まるべきであると思はれることが想像せられる。事實このやうな試みの行はれてゐる場合の多くについてかく推察することが必ずしも不當でないと思はれると共に、かゝる試みの極めて妥當であることを思はざるをえない。例へば正統學派によつて考へられた金屬制度の下に於ける貨幣現象の圖解についてこのことを言ひうるのであつて、教授の圖解への意欲はむしろこゝに出發したと見てよいであらう。しかし教授の畫に直ほすことによつて理解を具體的ならしめようと言ふ方法は屢々著者自身が描きうる如き構想を有たなかつた場合にも押し進められてゐる。ケインズの基本方程式を圖解せんとせる場合（本

書四〇四頁）の如きはそれであつて、そのためにかかる圖解による方法を不當に強ひるかの感を與へることは争ひえない。けれども經濟世界を全體として「眼に見えるやうに」描き得なければ満足しえない欲求と學問觀とを有つ者から見れば、——素直に言へば私自身も屢々かかる欲求を實行に移す一人であつて、従つてこの欲求に對するこゝで述べるやうな肯定が割引せられることを惧れるものであるが——自分の有つ方法と枠とに當て嵌めて見ようとすることは、納得をうるための止め難い方法であると同時に、別の方法によつて氣付かれざりし問題を見出す上には是非共必要なことであるとも言ひうるであらう。

畫を描くと言ふことが教授の方法によつて本質的なことでないことは言ふまでもないことであつて、重要なことは全體世界を「眼に見えるやうに」觀念しうることである。従つて部分的に取り出された現象の経過を明かにすることに重要が置かれてゐないで、それが取扱はれる場合にも常に全體との關係の中で解かうとする。言ひ換へれば部分的なる現象を明かならしめるための枠として全體世界が考へられるわけである。本書の中に所謂「説」と言ふべきものが見出されないのもこのためであるが、しかしこの意味でその全體を擧げて一つの態度が主張せられてゐることは注意せられなければならない。描かれた

世界を畫に移すと言ふことは本質的なことではないが、しかし畫に移さうとする欲求は畫を通して實感的な納得を得ようとするものであつて、論理的推論の結果を以て満足し切れない教授の態度をなすものである。例へばケインズによつて示された數學的展開の結果を畫に翻譯しようとしてられたことにも、このやうな自らの有つ方法的座標の中での納得を求められた跡を窺ふことが出来る。或はそれは問題を自らの問題とする態度とも言ひうるのであつて、そこに吾々は教授の學問に對する態度の嚴肅さを見なければない。

畫に描きうる世界のみを取扱ふと言ふことが結局均衡の世界或は安定の世界のみを取扱ふ結果となることは争ひ得ないであらう。このことは「經過分析」を主要問題とする最近の經濟學の傾向とは逆行するものであるが、同時に經濟學の傳統の中に強く生きようとするものである。この傳統はしかし「經過分析」の重要な據りどころたる主體から切り離された世界を考へるものではなく、むしろ主體によつて支へられ、主體の融し込まれた世界でなくてはならない。畫がかれらる如きものとしての安定の世界の構造が現實世界の動きを支配する力として考へられるのはこのためである。唯動的過程そのものが問題とせられる限りに於て、教授のシステムがそれを如何に包攝しうるか

の問題は残るであらう。かゝる對立は學問體系の相異の問題として鋭く映し出されてゐるかの如くであるが、實は經濟學がその發展途上に經驗しつゝある歴史の相として見るべきであつて全體は部分の經過を解きうるものとして描かれなければならぬであらうし、部分の經過の分析はそれを通してやがては全體を描きうるのではなくてはならないであらう。

二

以上私は教授の學問への態度について餘りに立入つて述べたきたやうであるが、それは本書の如き場合にあつては個々の問題に關する説明よりも全體を貫く態度が顧みらるべきだと考へるからである。このやうな見方からすれば本書の内容は全體世界を貨幣的に描くことが果して何のやうな形で、また何の程度まで満たされてゐるかと言ふ觀點から見らるべきであらう。それは同時に教授の立場を尊重する所以でなくてはならない。

本書はその構成から見るときは第四章「流通經濟の貨幣的機構」を中心として、前三章に於ける正統派經濟學の貨幣理論並に貨幣數量説の研究と第五章に於けるケインズの「貨幣論」を手懸りとする「一般物價と個別價格」との關係についての研究とがこれによつて媒介せられる形を以て構成せられてゐる。第

五章は豫想せらるゝ反批判に備へて貨幣的現象の中心理論を一般物價理論に見るべきことを主張せられたものであつて、吾々も亦そこに問題を見るものであるが、かゝる主張を含む全體の構想は第四章に於て與へられてゐるものである。

平生教授に接觸することによつて知りうるところから想像すれば、この第四章従つて本書全體を通ずる構想は教授の最近數年間に於ける Toke 研究を重要な契機として成立するに至つたものゝやうである。勿論教授の學問に對する態度乃至經濟世界を描く方法は十數年に互る正統學派殊にスミス經濟學への沈潜によつて學びとられたものであつて、このことを度外視して本書の構想を考へ得ないことは言ふまでもない。しかし正統學派の對象とした金屬貨幣制度の下に於ては、貨幣の價値に通ずる金屬の價値を通して、貨幣の數量と従つて物價とについて一つの自律性を有つメカニズムを考へ得たものが、貨幣數量より物價への因果關係のみを浮び上らしめて見る貨幣數量説に於ては、物價の決定を平面毎に考へ得ても、貨幣現象としての自律性を考へ得ないと言ふ不安定感を免れえない。これを制度として見れば金を離れた自由通貨制度の場合がそれであつて、この場合に於ける貨幣的機構は數量説のみからしては言はゞ開放的なシステムとなつて機構としての據りどころを失はなければなら

ない。貨幣的現象なるものを一般物價に見ながら、その決定理論のみに満足しえないところに教授のこゝ數年に於ける漠然たる不安と問題とがあつたと想像せられる。このやうな不安と問題とはしかし數量説そのものに内在するものであり、數量説を以て貨幣的世界を描かんとするものゝ共通に抱くべくして抱かなかつたものと言はなければならぬ。トゥーク（銀行主義）への研究はこの點についてある安心の境地を教授に齎らしたと思はれる。それは貨幣數量が物價によつて規定せられる關係をそこに見出すことによつて、從來貨幣的機構の外に置かれた貨幣供給をその中に含むものとしての機構を描きうるに至つたからである。

通貨主義と銀行主義との對立の眞の意味は從來解かるべくして解かれずにあつた問題の一つである。論争の當事者自らが問題の所在を充分に見極めてゐなかつたこともその理由の一つであらうが、兩者を「對立」するシステムと見て、ピール銀行法（一八四四年）によつてその當否が判定せられたと言ふ一般の感想に基くものである。このやうな見方は一般物價の決定を貨幣理論の中心課題とする久しきに互つて醸成せられた貨幣理論の風潮が、トゥークの如き貨幣の循環過程の分析を理解するだけの餘裕を有たなかつたことによるものである。銀行主義は、

從來一般に解せられたところによれば、物價が通貨量を決定するのであつて、銀行は通貨量を自由に左右しうるものではないと考へるものであつて、この點に於て通貨主義と正に相對立するものである。しかしトウキョウがかく考へるとき、そこに異なる過程に働く二種の貨幣の區別せられてゐたことが注意せられなくてはならない。即ち商人（生産者を含めて）間に於ける財貨の流通を媒介する貨幣と、商人と消費者との間の流通を媒介する貨幣とであつて、後者は所謂所得貨幣として生産過程から流れるものであるが、所得貨幣の源泉たる生産間（トウキョウの所謂商人間）の流通を媒介する貨幣は手形割引によつて銀行の供給するものである。従つて商人間の取引を媒介する貨幣の量は流通する財貨の價格によつて決定せられるものであつて銀行の自由に左右しうるものではないと言はなければならぬ。所得貨幣についてはそれが物價に影響する作用は認めるが、しかしその源泉は手形割引による通貨供給にあるのであつて、その限りに於て銀行の左右しうるものではないわけである。

以上のやうな貨幣の作用する場面とそれに基く區別とは既にスミス（『國富論』第二編第二章）の說いてゐるところであつて、トウキョウは恐らくそこから暗示を得たものと思はれるが、これを貨幣の循環過程の問題として物價との關係に於て見たことは

彼に歸せられなければならない。教授はこのやうな銀行主義理論の趣旨を正しく理解することによつて、 $M \rightarrow P \rightarrow M$ （物價↓通貨↓物價）と言ふ循環的因果關係として貨幣的機構の自律性を考へられるに至つたのであつて、この關係を示す手形割引による通貨の循環過程の圖解（本書三四九頁）は本書に收められた數多い圖解中でも最も重要なものゝ一つである。唯上に述べたやうな自律的な機構は教授も言はれる如く正常的な經濟に於けるものであつて、所得の一部として成立する貯蓄を越ゆる投資々金が銀行によつて供給せられる如き場合には獨自の物價決定が行はれるわけであるが、それらは以上の機構からの乖離として見らるべきものである。總じてかゝる動的乖離を把握すべき基本的シエーマを描くことが教授の中心的關心事なのであつて、かゝるシエーマが描かれるに至つたことについては上述の如きトウキョウ研究による物價と通貨との循環的、双方的因果關係への理解が重要な契機をなしたと思はれる。それはたゞに教授のシステムの成立にとつてのみでなく、これまで數量説のみを以てしては描きえなかつた機構を描き出したものとして甚だ尊重せらるべき收穫であらう。

三

教授が本書に題して流通經濟の「貨幣的機構」とせられた中心の意味を私は上述の點に見ようとするものであるが、若し「貨幣的構造」とも言ふべきものが均しく經濟世界を描くものとして問はれるとするならば、本書の構造は自ら異つた角度から、また異つた點に重點を置いて眺められるであらう。それは或は教授の意圖せられたところに沿はない見方のやうでもあるが、しかしかゝる見方が必ずしも成立しない見方でもないと思はれる點もあり、或は一の希望として考へられると思ふからである。

教授が貨幣理論の中心概念として「一般物價」乃至その反面としての「一般的貨幣價値」を考へられることは本書の全體を通ずる考方であるが、このことが特に強調せられてゐるのは第五章に於てである。それは最近に於ける個別價格に重點を置く貨幣的動態理論に對する一つの反駁的意味をも含むものである。教授が貨幣價値の内容として考へられる一般物價（それは個別價格の綜合としての觀念である）と、 $M = \frac{M}{P}$ なる關係によつて考へられる一般物價との間に、その意味するところに多少の距離が感ぜられぬわけではないが、勿論この場合教授が後の意味に於ける一般物價を經濟世界の貨幣的「枠」を示すものとして考へられたことは正しく理解せられなければならぬし、更

にかゝる枠が數量說的に決められることに満足せずして、貨幣と物價との循環的因果關係の機構として貨幣の世界を描かれたことの意味は十分に評價せられなくてはならない。かゝる一般物價を考へずしては個別價格は考へられぬと言ふことは認めなければならぬが、しかし個別價格を考へると言ふことは單に個々の價格を考へることではなくして價格の關係乃至價格體系を考へることであつて、全體の枠を考へると言ふことは内容としての價格體系を豫想するものでなくてはならない。經濟世界の貨幣的表現としての價格體系が諸財の共通に立つ場としての水準を無視して考へられぬことは言ふまでもないが、同時に諸財の關係がその中に見られなくてはならないであらう。唯問題はかゝる關係を捉へる方法にあると言はなければならぬ。單に諸財の關係を表はすと言ふ點のみから見れば計算單位としての貨幣を以て足るわけであるが、それは既に諸財の關係の成立せることを前提するものである。諸財の關係が貨幣を通して明かにせられることが貨幣經濟の一面であるとするならば、經濟世界を貨幣的に描くことは單に表現のみの問題ではないからである。このことは價格體系として描くことが單に一つの時間平面に於ける問題でなく、既に價格體系の推移を豫想する意味から一層重要なことではなくてはならない。

金屬制度の下に於ける貨幣的機構を取扱つた本書の前半は、金によるかゝる意味での描き方を含むものであつた。

金屬が貨幣を代表する市場に於ては凡ゆる財貨は金屬との關係を通して相互の交換關係を定められ、金屬を以て表はされる價格體系が見られる。交換關係は究極には財貨に投ぜられた生産費の關係から説明せられるものであるが、現實的には均しく生産費による關係として諸財に對する金屬との關係を通して全く同様な關係に表はされる。この場合に於ける金屬は諸財の關係がそれに關はらしめて共通なる表示關係を獲る測度乃至標準であつて、經濟世界を交換關係として描く一つの形式に他ならない。しかしそれが單なる形式としての計算單位に止まらぬことは、交換關係を描き出すべきものを自らの中に有つことによるものであつて、これを結果より見るときは金屬の中に生産費の一般的具體化を見ることに他ならない。教授が金によつて代表せられる貨幣と物價との循環的因果關係の機構を關係的(數量說的)變化と内容的(生産費的)變化とによりて說かれる場合には、以上の如き金の意味が考へられてゐるわけであるが、唯問題を貨幣の一般的價値乃至一般物價に見ようとするために、財貨世界全體が總括して貨幣と對立せしめられて、財貨世界を貨幣を以て描くことが背後にかくされる結果となつてゐる(この關係を明瞭に示すものは本書二四二頁に於ける圖解である)。

貨幣が金による裏付けを失つた紙幣制度の下に於ては、吾々は上の如き描き方の基礎を失ふであらうかの問題に出逢はなければならぬ。そこでは貨幣はもはや財貨の外にあつてこれを測るべきものを自らの中に有たぬこととなり、經濟世界は價格體系として描かるべき標準 *measure* を失はねばならぬからである。一般均衡體系の貨幣化の試みも既に描かれたることを前提するものであつて、同じ問題を殘すものと言はなければならぬ。一般物價に問題を見る教授の立場にあつては、通貨と財貨との關係によつて全體の枠が與へられ、この枠は物價と通貨との循環的因果關係によつて、言はず時間的に連續する枠として考へられて、外側からの規制が見出されてゐる。それは金による管ての物價と通貨とのメカニズムに代はるものではあるが、同時に金の果した價格體系を描く役割に代はるものではない筈であつて、そこに貨幣によつて價格體系を描く場合の問題があるわけである。しかしかゝる枠と内容との關係について教授が最後に示されてゐる見方は注目に値する。それはこの關係を貨幣的生產費による個別價格と一般物價との關係として、またこれによつて個體と全體乃至生産關係と市場關係との二元的

構圖を描きうるとせられてゐることである。このことは財貨の外からではなく、財貨に即して價格體系を描く方法として、吾吾の上に見た問題に重要な暗示を與へるものと思はれるが、同時に嘗て金を通して財貨の外にあつて經濟世界を描いた貨幣から、財貨の内容を構成する貨幣への論理が更めて問はるべきことを示すものであらう。

最後に本書全體を通ずる一般物價に對する深い信頼と愛著との由來する原因について一つの想像が許されるならば、それは諸財をそれを通約する生産費によつて並列せしめる正統學派の強い影響によるものと思はれる。一般物價の觀念は、經濟世界を交換關係の世界として見る方法から、交換關係を蔽ふ關係として浮び上らしめられたものであつて、そこから貨幣——一般物價の理論が交換價値の理論から獨立に取扱はれうる形を生じたと見られる。一般物價が全體の粹として安んじて取扱はれうるのはこの理由に基くものである。個別價格を考へやうとすることは、しかし單に價格體系として經濟世界を描くことではなくして、財貨を生産階梯に従つて、言はゞ立體的な配列に於て見ようとするものであつて、價格の變動と生産の變動とを連絡せしめることによつて動態を解かうとする要求に基くものであ

る。一般物價に重きを置くか價格關係に重きを置くかは一つの外形的な表はれに過ぎぬのであつて、根柢に於てはこのやうな經濟世界の見方の相異があるのではなからうか。

本書についてはなほ論ずべき多くの點が残されて居り、論じたところもまた自らの興味に偏して本書の内容を悉くしえなかつたことは、かゝる力作に對して甚だ禮を失するものと言はなければならぬ。讀者に與へるであらう誤解に至つては述ぶるまでもないところであつて、深く教授の寛恕を乞ふ次第である。

上に述べた描き方の問題の如きは言はば一つの整理方法の問題であつて、教授の有つ世界を動搖せしめる如きものでないことは言ふまでもない。對象としての世界が實感的に捉へられてゐることの安全感は本書全體を通じて痛感せられるところであつて、それは單なる才能のみの能くするところではないからである。本文を草するに當つて教授の影響を今更に感ぜざるを得ないと共に、深く感謝の意を表するものである。(一五、三、三)